

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 21 日現在

機関番号：34416
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22520341
 研究課題名（和文）
 アラン・ロブ＝グリエにおけるエグゾチスム
 研究課題名（英文）
 Alain Robbe-Grillet' s Exotisme
 研究代表者
 奥 純（ OKU JUN ）
 関西大学・文学部・教授
 研究者番号：00152413

研究成果の概要（和文）：

ロブ＝グリエの後期作品を研究するための重要な手がかりを得ることができた。今回、初期作品の物語の舞台となった土地の現地調査によって得られた知見をもとに、セガレンの提唱するエグゾチスムの概念を導入してロブ＝グリエの作品の再読を行い、ロブ＝グリエの作品創造の源泉には多文化共生に繋がる大きな世界観が存在し、その世界観が、後期の作品まで一貫して、物語の語りの構成の変遷として表現されていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

I have got an important key to analyze and comprehend Robbe-Grillet's works in his final period. I have found that Robbe-Grillet's basic idea for creation is, similar to Victor Segalen's exotisme, based on a thought for a cultural symbiotic relationship. It appears in various narrative structures in all of Robbe-Grillet's works until his final period.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	300,000	90,000	390,000
2012 年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ヌーヴォーロマン、ロブ＝グリエ、エグゾチスム、物語論、ポストコロニアリズム、

1. 研究開始当初の背景

アラン・ロブ＝グリエについての研究は、我が国も含めてフランスやアメリカなどで

始まってすでに約 50 年の歴史がある。初期の研究は、実存主義や不条理の思想を援

用したテーマ論的研究や、フランス・フォルマリズム勃興期のジャン・リカルドゥなどによるテキスト理論的研究から始まったが、その後、1970年代から1990年代にかけてロラン・バルトやツヴェタン・トドロフや、特にジェラルド・ジュネットによる文芸理論研究の飛躍的な進展を受けて、ロブ＝グリエ研究もその精度を高めていった。ジュネットは、それまでの経験に基づく主観的な文芸論を、調査と仮説と分類に基づく科学的な物語論へと発展させたのであったが、ジュネットが *Figure III* (Gérard Genette: *Figure III*, Seuil, 1972) 等の著書の中で行っているロブ＝グリエの初期作品についての分析は、分量としてはごくわずかであるにも関わらず大変示唆に富むものであったので、われわれも、ジュネットの物語論の概念と理論を随時援用して、ロブ＝グリエの初期から中期にかけての諸作品を物語論の展開過程として記述し、大きな研究成果をあげることができた(『アラン・ロブ＝グリエの小説』、関西大学出版部、2000年)。しかし、ロブ＝グリエ研究は、これ以後、世界的に見ても停滞期に入り、目新しい成果はほとんど見られなくなっていった。本研究を開始した時期は、このように研究が行き詰まった時期であり、特に、ロブ＝グリエの中期から後期にかけての諸作品の研究が全く進んでいない状況にあった。従って、ロブ＝グリエの研究をさらに一歩進めるためにも、また、ロブ＝グリエ研究の必要性を改めて社会に問うためにも、今までにない新しい解釈の視点を見いだしてロブ＝グリエの作品を読み直し、後期作品の研究への手がかりを得る必要があった。

2. 研究の目的

従来のロブ＝グリエ研究には、およそ次の二つの欠点を指摘することができる。ま

ず一つ目は、ごく初期の研究者であったオルガ・ベルナルが「ロブ＝グリエの小説は、精算の小説である」(Olga Bernal, *Alain Robbe-Grillet: Le roman de l'absence*, Gallimard, 1964) と述べたことによく現れているように、これまでの研究はおしなべて、ロブ＝グリエの小説が、いかに伝統を覆そうとしているかという、いわば後ろ向きの論調に終始しており、ロブ＝グリエの作品の持つ新しい魅力を積極的に見いだそうとする姿勢に欠けることである。次に、二つ目は、ロブ＝グリエの中・後期、特に1980年代以降に発表された作品についての研究がほとんど行われていないことである。そして、実は、この二つの欠点は深く関係し合っており、実際のところ、初・中期の作品の中にロブ＝グリエが芸術創作に込めた積極的な意味合いを見いだせないが故に、後期の作品の持つ意味が理解できず、中・後期の作品を分析し研究を進めることができなくなっているのだと考えることができるのである。

そこで、われわれは、近年、ロブ＝グリエの同郷人であり、20世紀初頭を生きた作家ヴィクトール・セガレンの唱えるエグゾチスムという概念に、ロブ＝グリエの作品創作上の積極的な姿勢を読み取る鍵を見いだした。セガレンはエグゾチスムを「永久に理解不可能なものがあることを鋭く直接に知覚することだ」と述べているが(『〈エグゾチスム〉に関する試論』、現代企画室、1995)、この多様なものの存在を喜ぶエグゾチスムの美学に基づいてロブ＝グリエの作品を読み直し、これまでのロブ＝グリエ研究の欠点を克服して、後期の作品群に研究を進めるための手がかりを得るのが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

研究の進め方としては次の3段階を想定していた。

- (1) ロブ＝グリエの初期作品群をセガレンの言うエグゾチスムの概念に基づいて読み直す作業は、本研究を開始する前にすでに取りかかっていたが、この作業を完遂するためには、ロブ＝グリエの第3作目の小説『嫉妬』の舞台となったマルチニック島の現地調査を行う必要があった。ロブ＝グリエの場合、現実の要素をどのように物語に組み入れ、どのように変更しているのかわからないと作品創作の意図を良く理解することができない。そこで、まず、マルチニック島の現地調査を踏まえて、フランスの旧植民地を舞台に展開する作品の制作を通じてロブ＝グリエが目指したものは一体何であったのかを明らかにし、ロブ＝グリエにおけるエグゾチスムの意味を理解する。
- (2) 現地調査と初期の作品群の分析を通じて得られたロブ＝グリエにおけるエグゾチスムの概念を踏まえて、中期の作品構成の実際を検証し、エグゾチスムの概念が作品の中で実際にどのように表現されているかを把握する。
- (3) 後期作品群の中でアンカーとなる作品を選び出し、(1)と(2)で得られた知見をもとに作品の分析を行って、後期作品全体の分析に進むための手がかりを得る。

以上の3段階それぞれが1年ごとの研究目標に相当していた。

4. 研究成果

結果、予想以上の成果が得られたが、成果については下記の3点に要約することができる。

- (1) マルチニック島を中心とした物語の舞台となった土地の現地調査を踏まえてロブ＝グリエの3作目の小説『嫉妬』の再解釈を行ったところ、作品全体の解釈としては、

かつてジャック・リンアルトが行ったような、この作品が植民地問題を取り扱った作品であるとする読み方はおおむね正しいが (Jacques Leenhardt: *Lecture politique du roman*, Minuit, 1973)、リンアルトのように、作品のテーマを人種間の対立に限定して考えるのではなく、ヨーロッパ文明の枠組みの中で「理解できるもの」とその枠組みの中では「理解できないもの」との対立に広げて考えるべきであることがわかった。こう考えて初めて、このテーマがロブ＝グリエの初期作品全般に共通して見られることが理解でき、ロブ＝グリエが作品創作を行う基本的発想には、セガレンのエグゾチスムによく似た多文化共生への志向があることがわかるのである。

- (2) 次に、(1)で得られた知見を基にロブ＝グリエの初期から中期にかけての作品を再読したところ、これまでのわれわれのロブ＝グリエ理解がおおむね正しかったことを再確認できた。さらに、その再読の作業と同時にを行った自伝的資料の収集と分析によって、新しい重要な知見を得ることができた。すなわち、ロブ＝グリエのエグゾチスムの究極は、世界や自分というものが堅固に実在するものではなく、結局は世界や自分のイメージに他ならないとする世界観であり、そのような世界観を基にして初めて、人は世界の多様性を確保しつつ未来を構想する可能性を持つことができるのだという信念であることを理解することができたのであった。そして、ロブ＝グリエの自伝に関する発言の中に、このような世界観が、後期の作品に至るまで一貫して、作品のさまざまな語りの構成の中に表現されてきたことを読み取ることができた。また、この世界観をテーマとして考えたとき、ロブ＝グリエ自身、後期の作品群を、①初期から

続く一連の物語作品、②自伝的著作3部作、③最晩年の作品、の三つのブロックに分けて考えていることがわかった。

(3) さて、今回の研究でこれら三つのブロックのすべてを分析し尽くすのはもちろん不可能である。しかし、今回の研究の目的が、今後ロブ＝グリエの後期作品全体に研究を進めるための手がかりを得ることであつたので、今回の研究においては①のブロックの研究のみを進めることとし、分析のアンカーとなる作品として1981年に発表された『ジン』(*Djinn*, Minuit, 1981)を分析の対象に定めて語りの構成の分析を行った。その結果、この作品には「瓦葺き状」とでも形容できる特異な語りの構成が用いられており、その構成の中にロブ＝グリエのエグゾチスムに基づく世界観が独特な形で表現されていることがわかり、合わせて、この作品の分析結果が、ロブ＝グリエの後期作品全体に研究を進めるための重要な手がかりとなる確信を得ることができた。

また、今後われわれが取り組むべき課題として後期作品群の②、③のブロックの研究が必要であることもわかったが、こうして後期作品全体に分析を進める研究の道筋を見つけることができたことが、今回の研究の最も重要な成果であつた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①奥 純、「アラン・ロブ＝グリエにおけるエグゾチスム(その5)」、関西大学文学会発行『関西大学文学論集第63巻第1号』、単著、査読無(2013年7月刊行予定)、pp.1-18

②奥 純、「アラン・ロブ＝グリエにおけるエグゾチスム(その4)-後期作品の研究に向けて-」関西大学文学会発行『関西大学文学論集第62巻第1号』、単著、査読無、2012、pp.1-23

③奥 純、「アラン・ロブ＝グリエにおけるエグゾチスム(2)」関西大学フランス語フ

ランス文学会発行『仏語仏文学第37号』、単著、査読有、2011、pp.37-55

[学会発表] (計3件)

①奥 純、「アラン・ロブ＝グリエの『ジン』について」、関西大学フランス語フランス文学会、2012年12月15日、於関西大学

②奥 純、「*Préface à une vie d'écrivain*について」、関西大学フランス語フランス文学会、2011年12月17日、於関西大学

③奥 純、「アラン・ロブ＝グリエにおけるエグゾチスム(2)」、関西大学フランス語フランス文学会、2010年12月18日、於関西大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥 純 (OKU JUN)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：00152413